



畑喜美夫監督

約2時間の練習で、監督の指示は締め言葉だけだった。「足りないところを自分で伸ばし、徐々に力を付けてください」。広島県立安芸南高(広島市)サッカー部の畑喜美夫監督(47)は、選手の自主性と想像力を育て、前任教を日本一に導いた。苦悩する教育現場において、力に頼らない指導が芽生えている。

「子供が頑張りたい環境を作り、動き出す瞬間を待つ。暴力でも子供は動くかもしれないが、指導力がないと認めるようなものだ」。全体練習は週2日、週末は試合。残り3日は自主練としても遊んでもいい。不足する技量や改善策を自

体罰
指導
4

強制せず自覚育む

選手との関係は密で、全体練習のない日は自主練の内容から体調、データの様子までノートに書いて報告させる。そこから選手を鼓舞する言葉を考え、練習内容を助言する。「上からの強制で育った子供は社会でも指示待ち人間になる。将来につながる力を育てるのが第一だ」。視線は卒業後に向く。

大阪府立茨田高校(大阪市鶴見区)は、コミュニケーション力を伸ばす指導に取り組む。中退率も低下し始めている。

かつては「評判の良くない学校」だった。授業中にうるつき、廊下で寝そべる生徒を連れ戻そうと腕をつかむと、「触んな、体罰や」と敵視された。生徒指導の徹底と同時に06年に始めたのが、コミュニケー

ニケーション力の向上だ。俺のことを分かってない」と反発する生徒は、教師に思いを伝えられていなかった。教師のコミュニケーションも向上した。中村光男校長は「『なげき、解決を図る』『ピアメディエーション』のや」と怒る教師自身にあって3年の授業で、辞書の貸し借りな手であげようとした。

この連載は田中博子、林田七恵、林由紀子、原田啓之、村上正が担当しました。

過去の例教訓に

過去を教訓に再発防止を図る学校もある。05年に野球部で体罰が発覚した駒大苫小牧高(北海道)では毎月1回、部員寮の管理人や顧問、校長らが集まり、部員の相談に応じる。他の運動部でも、校長が年に4、5回顧問を集めて指導法を尋ねている。



生徒が仲裁役となり、「コミュニケーション能力を磨く」「ピアメディエーション」の授業
大阪府鶴見区の府立茨田高校で22日、川平愛撮影